

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26244034

研究課題名(和文) 研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門

研究課題名(英文) A New Introduction to History for Researchers, Teachers and Citizens

研究代表者

桃木 至朗 (Momoki, Shiro)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：40182183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高大連携を通じた歴史教育刷新の取り組みの一環として、研究者志望だけでなく初中等教育の教員を旨とする学生、広く歴史学に関心を持つ市民・知識人に理解できるような、新しい歴史学入門のモデル構築と入門書の作成を旨とした。世界の学界の動きや2014年に開始された文科省などでの教育改革・入試改革の動き(日本史と世界史の統合が重要な課題となった)も踏まえながら、グローバルヒストリーと地域史・一国史、ジェンダー史など多くの領域での史学史や理論のまとめ・解説を生み出したほか、歴史学入門のモデル構築も果たし(現在試行中)、現在は時間切れで期間内に果たせなかった入門書の出版計画の具体化を急いでいる。

研究成果の概要(英文)：For the purpose of renovating history education through a collaboration between high schools and universities, this project aimed at creating a model of the introductory course of historical research and the publication of a textbook for this course. Such course and textbook must be designed as what is readable/ understandable, not only to future professional scholars, but also students who wish to be teachers of primary and secondary education, and citizens and educated people who might be interested in history as well. Keeping in pace with world academia and domestic educational reform (in which the integration of Japanese history and world history was a big issue), many theoretical and historiographical surveys and commentaries were publicized, in such fields as global, regional and national histories, and gender history. A course model is now on trial. We are now in a hurry to fix the publication plan, which had not been finalized within the term of this research.

研究分野：東洋史学

キーワード：世界史 歴史教育 史学史 歴史学方法論 高大連携

1. 研究開始当初の背景

歴史愛好家、歴史認識問題にこだわる日々との多さなどから見て、「日本人は歴史に関心が強い」と言えるだろう。その日本の歴史学界は、史料や理論を扱う際のきめの細かさ、国内だけでなく世界の多くの地域の歴史の専門家を擁する層の厚さの2点において、一国の学界としては世界一のレベルをもつと言って間違いはないだろう。ところがその一方で、現代日本社会では、受験用の暗記事項から離れられない高校教育、「グランドセオリー」喪失状況のもとでの細分化・断片化と「実証」への埋没を続ける大学での専門研究など、歴史の教育・研究のありかたへの批判・不信感も、一般的な人文学無用論の枠を越えて強まっているように見える。

これに対する学界・教育界の危機感を背景に、各地で新しい実践が試みられている。大阪大学史学系でも、最新の歴史研究の成果と現代社会の諸課題を踏まえて高校・大学などの歴史教育の内容を再構築するため、高大連携による研究・解説活動を続けてきた。大学教養課程用の教科書『市民のための世界史』(5 欄図書)はその代表的な成果である。しかしこうした新しい史実や歴史像は、マスコミ・市民社会でも、教育界や学界でもなかなか広まらない。換言すれば、従来通りの見方で何がいけないのかが、なかなか理解されない。歴史の危機全体の理由でもあるのだが、歴史の教育・研究の対象・方法や意義・目的が見えにくくなっている現在の状況は、新しい内容(史実や歴史像)を正確・適切に理解することをも難しくしている。

その背景には、佐藤正幸(連携研究者)がつとに指摘しているように、日本の大学における歴史学部の不在と日本史・東洋史・西洋史という3つの専攻の分立のような制度的問題が横たわっているのだが、そうした制度が具体的な教育方法やカリキュラムのレベルにどう影響しているかを見れば、真の意味の入門講義や入門書(史学史や理論を教えるもの)の不在が最大の問題であろう。教養課程には歴史学のなんたるかを示す講義はほとんどなく、専門課程では「史学概論」という講義はあっても、それは「西洋の歴史哲学や西洋史の潮流の紹介」でなければ「輪番で担当した教員が自分の専門領域だけ語る」ものであるケースが大半である。こうした日本の大学の状況では、歴史の研究・教育の専門家は歴史(学)全体を語れず、外部の人間は歴史(学)全体を理解できないのも当然である。この状況を変えねば、近年議論されている教育改革なども実現は困難である。そのような問題意識から、本研究は構想された。

2. 研究の目的

上述の問題意識にもとづき、本研究は歴史学の入門講義のモデル作りと入門書の出版を最終目標として立案された。それは内容的には、西洋思想史・西洋史方法論の総合的紹

介(ヘロドトスに始まり E・H・カーで終わるタイプ)あるいはマルクス主義、社会史、歴史=物語り論など特定の潮流を絶対視するといった、一般によく見られる入門とは一線を画し、複雑化・細分化している歴史学の全体をあえて鳥瞰ないし一覽しようとする。しかもそれは、近代歴史学成立以来の歴史学全体の対象・目的・方法などの変遷を概観するだけでなく、中等教育でも一般的に取り上げられる政治史、経済史、文化史(宗教史・思想史・芸術史・科学技術史...)などの伝統的な領域から環境史・災害史やジェンダー史など新しい領域までの、主要な下位領域ごとの動向や特徴を網羅したものでなくてはならない。現在の歴史学がそれらを幅広く扱い、中等教育の教科書にもそれらが書き込まれることが増加している現在、そうした入門なしに歴史学の全体像を理解したり、新しい歴史教育を実践することはできない。

形式面では本研究は、歴史学の専門教育を受ける学生はもちろん、歴史教員や他分野の研究者とそれらの予備軍、さらに歴史に関心をもつ市民が利用・理解できる入門講義・入門書を目指した。それはもちろん個別テーマの入門の積み重ねの上に成り立つものであり、そのための多人数の協力による多くの研究史整理と発表・講演等が必要である。ただ、最終産物が数十巻の講座や、数百巻のブックレットで、歴史学の全体像はあくまで読者が自分で経験的に(学生であればゼミや研究会での長期の修学を通じて)見つけたさねばならないという伝統的な形態。そうした出版物の良質なものは少なくない。にいきなり直面しても、高校までは「細かい知識」しか習っていないよう学生や専門外の人々は、歴史学をうまく把握できるだろうか。本研究ではその形態をとらず、最終産物としてはあくまで1科目(半年)の講義モデルと、それに使う1冊の入門書を目指すこととした。

3. 研究の方法

研究組織：従来も歴史教育について協力してきた大阪大学内外のメンバーを分担者・連携研究者としたが、史学史・歴史理論の専門家は大阪大学内に存在しないため、連携研究者として岡本・佐藤・成田の3名のベテランを学外で依頼した。その中で、代表桃木と学内の分担者である秋田・飯塚・堤に、日本史・東洋史・西洋史の各分野から院生またはポストドク(特任研究員)を最低1名ずつ加えて事務局を構成し、研究に関する企画・運営・広報などの業務にあてた。また歴史学の入門に必要な(a)歴史学全体の変遷、(b)史料と時間・空間などの基本概念、(c)政治・外交・軍事史、経済史・社会史、文化史、ジェンダー史、国民国家、民衆運動、交通史、科学技術・環境史など歴史学の主要下位領域について、代表・分担者・連携研究者などの間でそれぞれ分担を決めて、研究動向や史学史の取りまとめにあたることとした。また、主要大学の史

学概論・歴史学入門などの内容調査も行った（以上計画調書参照）。なお日本史と外国史の関係などが途中で重要になったため、3年目から中村翼を分担者に加えたほか、高校教員などの研究協力者に随時協力を仰いだ。

研究・解説活動

従来も高大連携活動の場として利用されてきた大阪大学歴史教育研究会の月例会を成果発表・討議の場とするほか、国内外の学会（2015年に設立された高大連携歴史教育研究会など）や高大連携組織、高校教員の研究組織その他にも積極的に参加し、成果の発表・普及や討論をおこなおうとした。

計画開始当初は従来の成果とそこで残された課題を明確化するため、初年度から第2年度前半にかけて『市民のための世界史』の連続合評会や、グローバルヒストリーを含む従来からの視点の再整理を行った。その後、第2年度後半から、本来の予定に従い分野ごとの史学史的なまとめ・報告をおこなった。

ただし本研究は、2014年秋に始まる中教審の学校教育改革の審議（2018年度には高校の新学習指導要領も公布）など、教育改革をめぐる外部の状況の影響を受けた。そのため、たとえば初年度（2014年度）後半以降に、当時議論されていた高校日本史と世界史の統合科目の新設 - 現在は、2022年度からのスタートが正式決定している - などに合わせて、自国史と外国史・世界史の関係のありかたなどのより深い検討が必要になった。また、入試改革（2020年度から実施）を含めて改革の方向性が決まった最終年度（2017年度）には、そうした改革の内容の正確な把握が課題となった。これらの理由で全体の進行が当初計画より遅れがちだったが、最終年度には具体的な授業モデル、入門書などの構想をめぐる討議に着手した。

授業への応用

教育に関するテーマを扱うものであるから、本研究の成果は通常の論文や学会発表のかたちだけでは十分でなく、授業その他での試行が求められる。そこで学部・大学院の入門講義にあたる「歴史学方法論講義」（特に学部生を主対象とする「歴史研究の理論と方法」）での応用を想定しながら研究を進め、各年度の授業で可能な部分から応用と課題の抽出を試みることとした。他大学の状況調査とあわせて、大学の種類・状況に合わせた応用法の議論も呼びかけることとした。

4. 研究成果

史学史・学界動向・大学状況のまとめ

5欄にも見る通り、史料論・地域論や政治・外交史、帝国史、経済史、交通史などのおなじみの分野から、日本史と世界史の接続統合（海域アジア史・東部ユーラシア史などの新しい空間設定、それに中華世界・中華帝国についての研究の新動向も踏まえた内容）、環境史・科学技術史やジェンダー史、ポストモダンニズムを踏まえた歴史学のありかたに至

るまで、多くの分野で成果を得た。発信の対象も、専門の学界とその予備軍、入門段階の学部生や中等教員とその志望者、一般市民など多様であった。あわせて、歴史教育改革の現状や大阪大学の高大連携活動と授業改革について紹介する図書、学会発表なども公表した。代表者や中村翼を中心とする高校教員向け解説・紹介活動は、歴史教育の目標・意味、そこで問題になる諸概念および歴史的思考・歴史叙述の構造とパターンなどに多く触れた。そのほか、秋田茂を中心とするグローバルヒストリーや、小浜正子を中心とするジェンダー史などの研究史総括は、特に系統的に行われた。それらの一部は、新科目「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」などの学習指導要領にも、教えるべき内容と養うべき「思考力・判断力・表現力」の両面で影響を与えていると評価できる。

他方、佐藤正幸・岡本充弘・成田龍一らが指摘する歴史学の組織・方法や概念に関連した諸問題は、歴史教育の意義・方法に関する高校現場の議論などとも関連づけながら、深めるべき議論の方向性を示している。秋田・桃木らも世界史と歴史学の全体に関するの見直しに着手している（図書7、9など）。

国際的な発信・討議

アジア世界史学会（AAWH）では以前の各大会でも高校教員を巻き込んだ活動を組織してきたが、本研究でも2015年の第3回大会（シンガポール）で、日本の教育改革と関連したパネルを組むことができた。同学会の電子ジャーナルARWHへの投稿が増加したり、高校・大学双方の歴史教育をめぐる海外の大学との協力が深まったのも大きな成果である。それ以外でもメンバーそれぞれの担当領域での国際交流がコンスタントに進展したが、秋田の「アジア発のグローバルヒストリー」の方法論を高度な研究成果の例示とあわせて普及する活動は、オックスフォードはじめ、中国・韓国・インドなど数多く大学・研究機関で歓迎されている。

授業モデルと入門書出版：残った課題

典型的な入門講義である上記「歴史研究の理論と方法」に向けて、計画期間内各年度の試行結果も踏まえながら、講義テーマのモデルを作った。最初に歴史学の全体動向、基本概念に関する講義群を置き、第6回以降に政治史・経済史など個別領域、第14回では学部から始まる研究の道筋を扱う（第15回はまとめ）プランである。2018年度春夏学期の同講義は、この順で試行中である。上記の歴史教育改革への対処などのため、このモデル作成までで研究期間が終わり、執筆者選定などを含む出版計画の具体化までたどり着かなかったが、現在その詰めを急いでいる。この出版も実現し、世界史像そのものを描いた『市民のための世界史』とセットで読まれるようになれば、歴史教育と歴史学の入り口のあり方が大きく変化するはずである。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

田口宏二郎

「経済成長」の中国史、*Discussion Paper in Contemporary China Studies*, 査読あり、24(4)、2014、pp.1-29.

桃木至朗・大阪大学歴史教育研究会(共著)、高大連携で取り組む歴史教育の総合的改善、歴史評論、査読あり、769、pp.25-34.

佐藤正幸

西洋史学はディシプリンか - 母国語による近代化の上に成立した世界的にユニークな学問、西洋史学、査読あり、260、2016、pp. 42-55 .

飯塚一幸

2016年の歴史学界 - 回顧と展望 - 日本近現代三 政治・社会(明治)、史学雑誌、査読なし(依頼原稿)、126(5)、2017、pp.148-152.

中村翼

中学校歴史教科書と日本史研究者の課題 - 育鵬社版の日本中世史記述の検討を通じて -、歴史科学(大阪歴史科学協議会) 228号、査読なし、2017、pp.7-14.

中村征樹

技術と学問のあいだ - 実学化と純化に揺れた革命期の学問、学術の動向、査読なし(依頼原稿) 22(2)、2017、pp.22-26.

秋田茂

高等学校新課程「歴史総合」の科目編成をめぐる試案、大阪大学教育学年報、査読なし、23、2018、pp.153-167.

[学会発表](計 21件)

佐藤正幸

日本型歴史文化における歴史教育の位置、大阪大学歴史教育研究会第79回例会、2014年6月21日、大阪大学.

Momoki Shiro,

In Search of Integrated Education of World and Japanese Histories in Japanese High Schools and Universities”, International Conference: Researching World History in the Schools; Nationwide and Worldwide: A Conference of the Alliance for Learning in World History, May 8-9, 2015, University of Pittsburgh, US,.

Momoki Shiro,

How to Teach World History in Japan, in Which Asia Is Well Positioned and Japan Is Fully Incorporated, paper for panel 3-4: Teaching Asian History to Students and Teachers within New Frameworks of Subjects and Curriculums, 3rd AAWH Congress, May 30, 2015, Nanyang Technological University, Singapore.

秋田茂

社会経済史学の新たな展開—グローバル経済史の登場、大阪大学歴史教育研究会第91回例会、2015年11月21日、大阪大学.

向正樹

歴史の時空を読む—『歴史学入門』執筆に向けての試論—、大阪大学歴史教育研究会第89回例会、2015年7月18日、大阪大学.

Kojiro Taguchi

The "Sinic worlds'" modernization or early -modernization, Workshop: Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In honor of Professor Victor Lieberman's 70th birthday (国際学会), Dec. 16, 2015, Osaka university.

桃木至朗

研究と教育をつなぐ歴史学入門講義、高大連携歴史教育研究会第5部会研究会「大学の教養教育と教員養成を考える—高大接続の入口と出口」報告、2016年6月25日・東京大学駒場キャンパス.

栗原麻子

公と私、男と女、そしてアテナイ民主制、大阪大学歴史教育研究会第98回例会、2016年7月16日、大阪大学.

Shigeru Akita

Indian industrialization and East Asia at the turn of the 19th-20th centuries---N.Y.K. Bombay Line, J.N.G. Tata and economic nationalism, 8th Indo-Japanese Workshop “Reconsideration of the 19th century from Asian Perspectives”(招待講演)(国際学会), Jan 6-7, 2016, Centre for Historical Studies and Jawaharlal Nehru Institute of Advanced Study, (JNIAS), Jawaharlal Nehru University, India.

荒川正晴・中村薫

大学の歴史学入門関係講義の現状と大学生の歴史についての知識状況、大阪大学歴史教育研究会第94回例会、2015年3月19日、大阪大学.

水野祥子

イギリス帝国の環境史、大阪大学歴史教育研究会第98回例会、2016年7月16日、大阪大学.

飯塚一幸

日清戦争・日露戦争研究の現在、大阪大学歴史教育研究会第93回例会、2016年1月16日、大阪大学。

田口宏次朗

経済成長と中国史、大阪大学歴史教育研究会第94回例会、2016年3月19日、大阪大学。

堤一昭

政治・軍事・外交史についての概観 - 世界史（おもに東洋）から -、大阪大学歴史教育研究会第93回例会、2016年1月16日、大阪大学。

市大樹

古文書学から史料学へ 日本古代・中世史の研究分野を中心に 大阪大学歴史教育研究会第97回例会、2016年6月18日、大阪大学。

桃木至朗

新科目「歴史総合」と世界史教育の未来、第51回愛知県世界史研究会（招待講演）2017年6月10日、愛知大学豊橋校舎。

Shigeru Akita

The Development of Global History Studies in Japan and an example---PL480, Food Aids to India and the United States in the 1960s, Special Lecture on Global History, Department of History (招待講演), Feb. 14, 2017, Kyungpook National University, Daegu, Korea.

Shigeru Akita

Creating Global History from Asian Perspectives; Challenge and Collaboration from Osaka, International Symposium on "Global History in East Asia: Coordination and Innovation"(招待講演)(国際学会), June 17, 2017, Beijing Foreign Studies University (BFSU), Beijing, China.

Shigeru Akita

From Decolonization to Economic Development: The Colombo Plan, the Bandung Conference and Japan's economic cooperation, Bandung Humanisms: Towards a New Understanding of the Global South(招待講演)(国際学会), June 19, 2017, Nanyang Technological University, Singapore.

Shigeru Akita

From Empires to Development Aid -- International Economic Order of Asia in the 1950s-60s in Global History, The Practice of Global History,(招待講演)(国際学会), Sept. 30, 2017, Nuffield College, University of Oxford, Oxford, UK.

②中村征樹

市民のための科学教育、日本科学教育学会第41回年会シンポジウム『科学教育とは何か』（招待講演、サンポート高松、2017年8月30日）。

〔図書〕(計 12件)

秋田茂・荒川正晴・栗原麻子・坂尻彰弘・桃木至朗(大阪大学歴史教育研究会編) 市民のための世界史、大阪大学出版会、2014、315p.

三成美保・姫岡とし子・小浜正子(共編著) 歴史を読み替える - ジェンダーから見た世界史、大月書店、2014、314p.

桃木至朗(責任編者)、秋田茂、飯塚一幸、堤一昭、後藤敦史、向正樹、中村翼、小浜正子ほか(共著)(大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会共編)、史学会125周年リレーシンポジウム2014 1 教育が開く新しい歴史学、山川出版社、2015、238p.

小浜正子、ジェンダーの中国史、勉誠出版、2015、295p.

岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺賢一郎(編) 歴史を射つ - 言語論的転回、文化史、パブリックヒストリー、ナショナルヒストリー、御茶ノ水書房、2015、430p.

成田龍一・吉田裕(編) 記憶と認識のなかのアジア・太平洋戦争(岩波講座アジア・太平洋戦争戦後編) 岩波書店、2015、290p.

南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵(責任編集)、新しく学ぶ 西洋の歴史—アジアから考える、ミネルヴァ書房、2016、420p.

秋田茂・桃木至朗(共編) 市大樹・中村翼、後藤敦史ほか(共著) グローバルヒストリーと戦争、大阪大学出版会、2016、360p.

秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗(共編著) 世界史叢書総論 「世界史」の世界史、ミネルヴァ書房、2016、453p.

桃木至朗・中村翼ほか、高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案(第一次)』(高大連携歴史教育研究会刊、同運営委員会・同第一部会用語精選WG編) 2017、62p.

鈴木靖民・市大樹ほか、日本古代交流史入門、勉誠出版、2017、573p.

小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・
江上幸子(共編)、荒川正晴ほか(共著)、
中国ジェンダー史研究入門、京都大学学
術出版会、2018、486p.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
大阪大学歴史教育研究会 HP
<https://sites.google.com/site/ourekikyo/home>

6. 研究組織

(1)研究代表者

桃木至朗 (MOMOKI Shiro)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：40182183

(2)研究分担者

栗原麻子 (KURIHARA Asako)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：00289125

秋田茂 (AKITA Shigeru)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：10175789

荒川正晴 (ARAKAWA Masaharu)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：10283699

小浜正子 (KOHAMA Masako)
日本大学文理学部・教授
研究者番号：10304560

向正樹 (MUKAI Masaki)
同志社大学・グローバル地域文化学部・准
教授
研究者番号：10551939

水野祥子 (MIZUNO Shoko)
駒澤大学・経済学部・教授
研究者番号：40372601

飯塚一幸 (IIZUKA Kazuyuki)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：50259892

田口宏二郎 (TAGUCHI Kojiro)
大阪大学大学院・文学研究科・准教授
研究者番号：50362637

後藤敦史 (GOTO Atsushi)
京都橘大学・文学部・准教授
研究者番号：60710671

堤一昭 (TSUTSUMI Kazuaki)
大阪大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：70283835

中村翼 (NAKAMURA Tsubasa)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70748970

中村柁樹 (NAKAMURA Masaki)
大阪大学・全学教育推進機構・准教授
研究者番号：90361667

(3)連携研究者

市大樹 (ICHI Hiroki)
大阪大学大学院・文学研究科・准教授
研究者番号：00343004

岡本充弘 (OKAMOTO Michihiro)
東洋大学人間科学総合研究所客員研究員
研究者番号：40113930

佐藤正幸 (SATO Masayuki)
山梨大学・教育人間科学部・名誉教授
研究者番号：90126649

成田龍一 (NARITA Ryuichi)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：60189214

(4)研究協力者

中村薫 (NAKAMURA Kaoru)
吉嶺茂樹 (YOSHIMINE Shigeki)
大西信行 (ONISHI Nobuyuki)
矢部正明 (Yabe Yishiyuki)
川島啓一 (KAWASHIMA Keiichi)